

インドにおける民族独立運動と中国における抗日戦争の相互関係

平成 25 年 5 月 15 日

水野光朗

1. はじめに

本講で明らかにすること：

1. インドで行われていた民族独立運動は、インドという閉ざされた一地域においてのみ展開されていたのではなく、国際的に（全世界的規模で）展開されていた反ファシズム・反植民地・反帝国主義運動と常に接点を持ち、連携していた。
2. この民族独立運動は、とりわけ、抗日戦争をたたかっていた中国民衆（中国人民）との連帯を重視していた。

2. インドの民族運動

第一次世界大戦まで	おおむね対英協力。イギリスによる植民地支配の枠組みの中で、インド人民の要求を実現すること。
大戦間期以降	反英独立。イギリスによる植民地支配からの脱却。

インドの民族運動の主な担い手

	インド国民会議派	全インドムスリム連盟	インド共産党
創立	1885年	1907年	1920年（コミンテルン第2回大会に M.N. ローイが出席） 1925年（カーンプルでインド共産党成立大会）
主な支持層	当初はブルジョアジー、後に民衆（労・農）	主にムスリム	民衆（労・農）

3. 中国の民族運動

1932年3月14日	安内攘外	蒋介石、国民党の方針。外敵を防ぐには国内の安定が先決
(国共内戦)		
1936年9月1日	逼蔣抗日	中共の決定。中共、反蔣抗日から路線転換し、蒋介石に抗日を迫る
1937年2月10日	連蔣抗日	中共の決定。蒋介石と連合して抗日する
1937年2月15~22日	容共抗日	国民党三中全会。中共を認めて抗日する
1937年7月7日	七七事変	
1937年9月23日		抗日民族統一戦線の成立

4. 対華医療使節団 (1938年9月1日~1943年5月)

M. Atal, M. Cholkar, D. Kotnis, B.K. Basu, D. Mukerji

5. インド、中国内部での軋轢

a) インド

パーキスターン運動

b) 中国

国民党支配の反動化

アジア太平洋戦争の勃発により、中国は連合国の一員となったが、直接には抗日戦争の好転には至らず、またビルマ＝ルートの閉鎖により、国外からの援助が困難となった。このような状況の中で蒋介石は、日本との戦争の最終的決着は、米英に委ね、自らはむしろ戦後に備えて、共産党を抑圧し、独裁的支配体制の強化をめざした。

池田誠ほか著『図説 中国近現代史』、法律文化社、1993年、136ページ。